

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第174次)

2012年4月から開始した藤原宮朝堂院朝庭の調査は、12月17日に埋め戻しを完了しました。調査面積は1,850㎡で、延べ8カ月にわたる調査でした。今次調査の成果をまとめると次のとおりです。

大規模な整地と建物群 2012年4月から6月にかけての調査では、調査区のほぼ全域で、藤原宮期の^{れき}礫敷^{じき}を検出しました。7月以降、調査区の南3分の1の範囲で礫敷を除去し、上層の整地層である第二次整地土を段階的に掘り下げたところ、掘立柱建物、柱列、溝、穴等を検出しました。掘立柱建物は調査区の西南部分で多く見付き、昨年の第169次調査で検出した建物と近接しています。これらの建物群は、重複関係から建て替えがあったことがわかります。いずれも藤原宮の造営にかかわる仮設の建物群であったのでしょう。

沼状遺構と木屑だまり 調査区の北辺付近では、これまでの発掘調査で確認してきている沼状遺構の範囲を探るべく、9月以降に^{たちわり}断割調査をおこないました。その結果、沼状遺構は調査区の北辺付近に南端があり、これより北側に広がっていることがわかりました。また、調査区東北部では、礫敷面が楕円形に落ち込んでいる部分を確認し、その落ち込みの断割調査をおこなったところ、下層に多量の木屑が堆積していることが判明しました。木屑は整理箱で180箱におよび、宮造営時の木材加工で生じたものとみられます。今後は木屑の分析等を通じ、宮造営過程の実態解明に役立てたいと思います。

(都城発掘調査部 森川 実)



調査区全景(北東から)